

天神山

天神野新から南東側をながめると、小さな盛り上がりが見つかります。これが、魚津市指定文化財（史跡）の天神山（標高約163m）です。天神山は、天正10（1582）年の魚津城の戦いの折、越後の上杉景勝が後詰として陣を敷いた所として有名な山城ですが、もともとは、片貝川と布施川に挟まれた台地上の独立丘陵です。山頂部には削平地が何段も見られますが、削られた跡をよく見ると、礫層からなっていることがわかります。こ



この礫層は、今から数十万年前の片貝川の河床であり、現在の片貝川の河床と比較すると標高差が100m以上あることがわかります。片貝川は、場所によって礫の大きさがかなり大きく異なり、天神山の礫の大きさを調べると、現在の片貝川のどの場所と近いかを考えることができます。なお、ここは史跡ですので、ハンマーで礫を割って調べることはできません。



礫層の拡大写真



天神山山頂付近の礫層



片貝川の礫の大きさ（東山周辺）



片貝川の礫の大きさ（河口付近）